

---

# CROSS † CHANNEL ~ Again to that world ~

CROSS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CROSS+CHANNEL Again to that world

### 【Nコード】

N6900A

### 【作者名】

CROSS

### 【あらすじ】

一人の少年と、その仲間たちのあの暑い夏が再び…

## プロローグ（前書き）

このゲームを知っている方、知らない方もどうか…楽しんで頂けたら、幸いです。

更新遅れたらすみません…

## プロローグ

群青学園：

ここに一人の少年が通っていた。

名前は『黒須太一』。

この少年は皆といる時は陽気に振る舞っていた。

しかし、一人になると無表情になる。

彼は感情がなかった。

だから振る舞っていたのだろう。

一人の少女は

「あなたはうすぎたない化け物です」

「人間に擬態しているに過ぎない」

とも言った。

しかし、彼はもうこの世界にはいない。  
しかし、生きている。

彼はラジオ放送をしている。

この世界ではなく、もう一つの世界で…その放送は皆の世界にも届いている。

その放送は瞬くまに広がっていった。皆に生きる希望さえあたえた。

「ありがとう  
と伝えたい。」

しかし…伝えることができない。

この世界にいないから…

そしてまた…

あの暑い夏の日が再びやってきた…。

## プロローグ（後書き）

これからも書くので、どうか…暖かい目で見守っていてください。  
また見て頂けたなら幸いです

第1話1日目／朝／？（前書き）

かなり遅れました…  
すみません…

## 第1話 1日目 / 朝 / ?

「今日も暑いな……」

一人の少女はそう言いながら坂を登っていた。

少女の名は『佐倉 霧』。

群青学園に通っている。

私は今まさに学校に向かっていた。

霧

「どうしてこう……暑いのかな……」

私は持っていたタオルで汗をぬぐった。

しばらくすると、交差点に出た。

その交差点の近くに小さな商店がある。

看板は『田崎食料』

私はよくここを利用している。

理由はここにしか近くに商店がないからだ。

霧

「ごめんくださーい……」

……

誰もいなかった。

この店は留守が多い。

この店主は無類の鉄道マニアで、ふらりと店をあけては電車の写真を撮りに行っているらしい。

霧

「また写真を撮りに行っているのかな……」



私はそうだと思い、ツケでジュースを買うことにした。

霧

「どれにしようかな…」

目の前に『野菜ジュース』があった。

霧

「これにしようかな…」

私は『野菜ジュース』を手に取り、ノートをちぎり貼った。  
私はちらりと皆のを見た。

「9 / 2、オレンジウォーター…山辺 美希。」

「9 / 3、マグネシウムサイダー…桜庭 浩、普通です」

「9 / 4、桃源ウォーター…宮澄 美里。」

「9 / 5、レモン水…桐原 冬子」

……………

みんなつけすぎたよ…。あと、桜庭先輩、コメントはいらないです…。

「あれ？」

よく見ると古い紙が一番下に貼ってあった。

「9 / 2、野菜ジュース…黒須 太一」

「まだ貼ってあるんだ…」

私は彼のことを思い出した…。

ひどいことを言ったな…。

私は田崎食料を出た…

第1話1日目／朝／？（後書き）

また読んでいただけたら幸いです

第1話1日目／朝／？（前書き）

取り合えず次です

## 第1話1日目／朝／？

坂を登っていると…

？？？

「霧ー！！…」

後ろから声をかけられた。

霧

「美希！おはよう。」

声をかけた少女は『山辺 美希』。私の親友だ。

美希

「いつもこの時間だよねー。」

霧

「うん、ゆつくり行けるからね。」

私たちは他愛のない話をして歩いていた。

霧

「あっ！そういえば…」

美希

「ん？どうしたの？」

霧

「うん、あのね……」

私は言うのを躊躇した…。言いたいわけじゃない…、ただ…。

美希

「はやく言いなよー…」

霧

「あ…、あのね…、太一先輩のレシートが田崎食料に貼ってあったんだ…」

美希

「そっなの？そっか…」

私にとって、黒須太一……太一先輩はかけがえのない存在になっていた…。

ただとなった直後に……いなくなっていた。いなくなっただ…

美希

「また会いたい…？」

霧

「うん、会いたい…」

先輩…また会えますよね…？

私は太一先輩のことを思いながら美希の話をうわのそらで聞きながら学校に向かった…

学校につくと…

美希

「桐原センパイ!!」

桐原と呼ばれた少女は後ろを振り返った。  
冬子

「おはよう。山辺、佐倉」

霧

「おはようございます、桐原先輩。」

美希

「おはようございます」

私たちは各々挨拶をした。

美希

「そうだ、先輩。霧が黒須先輩のレシートを見つけた見たいですよ。」

冬子

「そうなの？佐倉？」

霧

「はっ、はい……」

美希ってば……余計なこと言っ

冬子

「そっか……太一のレシートが……」

私たちはそんなことを話ながら教室へ向かった……

## ＋ループ世界＋1日目／朝

「ふあゝ…ふう…」

朝…なんて清々しいんだ！！

「さて…今日も『日課』をしますかねー」

俺は今日も学校に行く…。ラジオの鉄塔を建てるために…。

「世界と自身とを…」

俺はつい最近から学校に行くまでと帰るときに歌を聞くことにしている。その他の時間は極力聞かないことにしている。

何故かって？そりゃあ勿論……

電気がきてないからだよ！！

つと…自己紹介がまだだったな。

俺の名前は『黒須 太一』。元(?) 群青学園の生徒だった。今は行っていないけど…いや…行ってるけど、行っていないに等しいかな……

なんでだって？それはだな…ちょうど去年だったっけ…謎の組織に連れ去られて…じゃないぞ！

…まあ、簡単に言っと…

『俺を含めた8人＋1人がループ世界(一週間を繰り返す)に閉じ込められ、俺以外(正確に言くと俺＋1人)の皆を還して、俺1人だけこのループ世界に閉じ込められたままだから』

かな…。

辛いかって？そりゃあ…辛いに決まっている…悲しいし…  
でもな…これでよかった…人を傷付けなくて済むって思うと…この  
世界に残ってよかったんじゃないかって…よく思うんだ…

「って…誰に話しかけているんだか…」

俺は…今も生きている…この世界で…

お前らも生きているよな？みんな…？そして…霧…

みんな…どうしているかな…

元気にしてるよな…

会いたいよ…霧…

俺は昔の事を思い出しながら学校へ向かった…

学校に着き…

「よっしゃあ！今日も頑張るぞ！」

俺はラジオ塔を造り始めた…



## 第1話1日目／夕方

霧

「今日も授業が終わったし…どうしようかな…」

私はこれからのについてのことを考えていると…

美希

「霧〜！何してるの？」

霧

「これからなにしようか考えていたんだ。」

私は美希にそう言った。美希は

美希

「部室に行ってみる？」

霧

「え！？部室？」

部室…先輩との思い出がある場所…あそこに行くと…胸が痛くなる…  
…辛くなる…  
どうしようかな…

霧

「ん〜…」

美希

「どうするの…？」

霧

「行ってみようか…」

美希

「うん、それじゃあしゅっぱーっ!」

美希は嬉しそうに歩いていった。

霧

「楽しそうだなあ…」

私は美希の後ろ姿を見ながら、美希の後を追いつけた。

部室には先客がいた。

美希

「おや、桐原先輩。先輩も暇なんですかあ？」

美希は先に来ていた桐原先輩に質問をした。  
つて美希…直球過ぎるよ…

冬子

「ちっ違っわよ!朝の佐倉の話を聞いて来なくなったのよ。」

私の話?……ああ、朝の話か…。

霧

「そう…なんですか…。私もてっきり暇なのかと…」

冬子

「しっ失礼ね!」

霧、美希

「すっすみません…」

冬子

「別にいいわよ…。ふう…久々に来たわね…」

霧

「はい…。あれ以来、来てませんでしたから…。来たら思い出して胸が苦しくなるから…」

美希

「霧………」

冬子

「佐倉は…太一のことが好きなの？」

霧

「えっ！？……はい…。」

冬子

「そっか…」

私たちは久々に部室に来て一年前のあの夏の事を話していた…

＋ループ世界＋1日目／夕方 夜（前書き）

更新遅れてすみません…（－；

## ＋ループ世界＋1日目／夕方 夜

太一

「え〜と…これがここで…これがここだろ…。んで…これがここ…」

ー

俺はいつの間にか熟練の技を身に付けていた。それもそのはず、独りでラジオ放送をしているからだ。

太一

「ん〜…これがここで……………よし！これでいいはず…」

太一

「ふう…今日はこれくらいにするか…」

俺は今日の作業を終えたので帰ることにした。

いつもの帰り道…でも今日は…

太一

「哀しいな…思いださなければよかったな…」

霧…会いたい…

それにみんな…

声を聞きたい…。

ぐううう〜…………

太一

「ん…晩飯は…いつも通りに作るか…」  
この世界にとどまり、俺は自炊をすることが出来るようになった…  
…ってか…それぐらいは出来ないとまずい…。

太一

「さあて…今日は…じゃがいもでも蒸かして食べるか…」

じゃがいもを蒸かす…霧に作ってもらったっけな…。

太一

「なつかしいな…会いたい…」

俺はそう思いながら、懐かしい食事を味わった…。

太一

「さて…食事も風呂も終わったことだし…日課をして寝るか…」

俺は毎日日課をしている。何かって？それは…日記だ。  
日記だけが…唯一形として残せる物だからな…。

太一

「さて…書くか…」

今日の出来事を事細かく書く…それが唯一…俺を書き留めれる…俺  
が存在しえる事…

俺は日記を書き始めた。

太一

「よし……後6日で次のノートに変更だな……。一週間がたつのは早いよな……」

俺は、あれから何故か年をとらなくなった……理由は不明……

太一

「ふあああ……寝よ……」

俺は……寝た……

## 第2話／三日月／昼（前書き）

いっせいに三日月です...（くーく...）



## 第2話 / 三日目 / 昼

霧

「人集めか…。何人集めよう…」

私は人を集めることになった…。なんで集めることになったかって？それは……

数十分前…

美希

「合宿<sup>キャンテ</sup>をしよう！」

美希がいきなりそんなことを言った…。

霧

「合宿！？なんで！？」

美希

「いや…、部活の面々とは最近あまり交流ないでしょ？だからさ、合宿やって交流を深めようかってね」

霧

「交流を深めようってね…。それは以前、太一先輩がやって失敗したじゃない…。」

美希

「いいじゃん！しようよー！」

霧

「でも…」

したくない訳じゃない…  
でも…

???

「その話、乗ったわ…。」

いきなり声がした。

霧

「えっ!？」

美希

「その声は…支倉先輩!？」

曜子

「その通りよ、山辺。よくわかったわね、佐倉はわからなかったの  
に…。」

美希

「えへへ、頑張りましたから」

霧

「すみません…」

曜子

「いいのよ、気にしないで、佐倉。それよりさっきの話だけど…」

美希

「あつ、はい。皆で合宿の話ですよ。支倉先輩も行きますか？」

曜子

「ええ、行くわ…」

美希

「やったあ　じゃあ、日時と場所はどうします？」

霧

「日時だけど…日曜日 shouldn't? 来週の月曜日は休みだし…」

曜子

「そうね…それで行きましょう…。場所は…祠のある場所で…」

美希

「はい、いいですよ　決まりです！取りあえずは…支倉先輩は宮澄先輩を、霧は桜庭先輩と島先輩を頼むね」

曜子

「わかったわ…」

ヒュッ…

支倉先輩は消えた…

美希

「じゃあ、私たちも行こう」

霧

「わかった、じゃあまた後で…」

こっついう感じで私は人を集めることになった…

## ＋ループ世界＋三回目（前書き）

中々大変ですよね（＾－＾；）

## ＋ループ世界＋三回目

太一

「あれだな…もう…慣れてくると…すぐ終るよな…」

あれから俺は、長い周をかけてラジオの鉄塔を一人で完成させることを早くできるようになった。それもそのはず、もう何万周やったか…

できて当たり前だよな…

そんなふうに思えるようになったことが…不思議だ…

太一

「さて…暇だ…何をするかな…」

何をしよう…暇すぎる…

太一

「何か作ってみようかな…」

そうだな…そうしよう！

太一

「毎週放送して…走るのは大変なんだよなあ…」

どうしよう…

やはりやるなら…生放送がいいよな…

太一

「タイマーでも作ってみますか！」

生放送じゃないってのは…ネックだけど…

たまには…な…

太一

「よし！いつちょやってみますか！」

そして、俺はタイマーを作り始めようとした…

太一

「思ったんだけど…材料あるかな…」

この学校にあるといいけど…

なかったらどうしよう…

玄関

太一

「やっぱないよなあ…」

やはりなかった…どうすっかなあ…

太一

「んじゃあ…つぎは…」

ごみ捨て場

太一

「何もなし…」

ん？一応言っておくけど…

材料探しだからな！？

太一

「ん…どこにもない…………あつ…！」

工場

太一

「始めからここにこればよかったな…」

やっぱり工場には沢山材料があるよな…

太一

「さて…必要な部品が手に入ったわけだし…」

俺は再び学校に向かった…



第3話／5日目／朝（前書き）

かなり遅くなりました…（T―T）

### 第3話 / 5日目 / 朝

霧

「ふう〜、なんとかノルマは達成したかな…」

私は、一昨日美希から言われた名前の人にキャンプの話を持ちかけてみた。

名前は

1・島 友貴先輩

2・桜庭 浩先輩

だ。

昨日、二人が一緒にいるときに持ち出してみた。

霧

「すみません、島先輩、桜庭先輩、お話があるのですが…いいですか？」

友貴

「どうしたの、佐倉？話って？」

霧

「はい、日曜日にキャンプをやるんですが…どうかなって…」

桜庭

「キャンプか…ふっ…あの時以来からやっていないな…」

友貴

「そうだなあ……うん、いいよ。俺は参加するよ。」

霧

「ほんとですか!？」

友貴

「ああ、桜庭はどうする？」

桜庭

「断る理由がないな…参加する。」

霧

「お二方、ありがとうございます。それでは、土曜日に坂を降りたところにあるファミレスで打ち合わせがあるので来てください。時間は10時です。」

友貴

「わかったよ、それじゃ」

桜庭

「わかった」

先輩方は教室へ戻って行った。

美希

「きりー！」

美希がニコニコしながら走って来た。

美希

「どうだった！？先輩たちには聞けた？」

霧

「うん、聞いてOKがとれたよ」

私は嬉しそうに美希に報告した。

美希

「やったね 私の方も桐原先輩のOKがとれたよ」

霧

「そっかそっか」

曜子

「私の方も大丈夫よ…」

支倉先輩が一瞬にして出てきた。

美希

「うわぁ！？…びっくりしたぁ…。OKだったんですね？」

曜子

「ええ、土曜日の事も話しておいたわ。」

美希

「そーですか、それじゃあこれで問題ないですね。」

曜子

「それじゃ、またあした…」

支倉先輩がまた一瞬で消えていった…

霧

「それじゃ、行こっか」

美希

「そうだね 行こっ」

私たちは教室へ向かった。

第6話／6日目（前書き）

凄い長い間……すみません……（――）……

## 第6話／6日目

AM 10:00

「ということで、明日のことについてで集まってもらいました」  
美希は拍手をしながらみんなに言った。

「それで、何について話すのよ」

桐原先輩は退屈そうに頬杖をしながら言った。

「それは私が…。えっと、明日のキャンプで何が必要かってことで話するために集まってもらったんですよね？支倉先輩？」

私は説明をし、あつてるかを支倉先輩に尋ねた。

「ええ、その通りよ佐倉。それで集まってもらったの。用意はしっかりしないといけないわ。みんな、それぞれ意見を言って。」

支倉先輩がみんなに意見を促した。

「そうですね…。テントは必要ですね。」

宮澄先輩が考えた末の意見を言った。

「それは当たり前でしょ、姉貴…。」

島先輩がため息をつきながら宮澄先輩に言った。

「それじゃあ、友貴は何が必要だと思うの？」

宮澄先輩が島先輩に言った。

「ん…。暇にならないものとか？例えば…ありきたりで『トラップ』とかかな？どうかね？」

島先輩がみんなに尋ねた。

「うんうん、それは必要っすね」

美希がニコニコしながら同意した。

「UNOとかもいいよね」

私は島先輩の意見に付け加えた。

「うんうん、UNOもいいよね さすが霧」

「まあ、それは各自で考えるとして…他には何かない?？」

支倉先輩が各々の意見をさらに促した。

ん…他にはって言われてもな…

「大切なものを忘れているぞ。」

各々が考えているときに、突然桜庭先輩がいい始めた。

「何?」

皆が一斉に言った。何かあるのだろうか…。

「決まっている、ラジオだ。」

桜庭先輩がさぞ当たり前かのように言った。

「あつ…」

みんな、驚いた。私も…

大切なものを…忘れるところだった…

みんな…押し黙った…。明日はラジオ放送…、太一先輩の…。

「そつそれじゃあ、次は誰が何を持って行くかを決めましょっ」

美希は暗い空気を紛らわすかのように、明るく言った。

「そつね。それじゃあ……………」

……………

「それじゃあ、明日の9：00にまた…」

桐原先輩が家に向かって帰って行った。

「それじゃあ…私たちも帰りましょっ。」



「そうだね、帰ろっか。明日の準備もしないといけないしね。」

宮澄先輩と島先輩がふたりそろって帰っていった。

「またな……」

桜庭先輩がそれだけを言って帰っていった。

「それじゃあ、私たちも……」

「そだね、帰ろっか。」

「ええ、それじゃ……」

私たちは、各々の家に帰り、色々な思いを描きながら寝た……

第6話／6日目（後書き）

ありがとうございます？

## 第1部／最終話／前編（前書き）

勝手ながら、第1部としました？どうぞ、見てやってください。m  
（――）m^

## 第1部／最終話／前編

「ふう…こんなもんかな……」

一週間の最終日の今日、俺はラジオ放送を録音しておいたテープをセッティングした。

今日で最後…

「早いよなあ…一週間って…」

毎回毎回思う…早くなって…

「さて…まだまだ時間があるし…ちょっと散歩してきますか…」

俺は残りの時間をこの一週間の街を…いつもと…何も変わらない街を散歩することにした…

「やつほー!」

「遅いよー、美希…」

美希が指定の時間を30分遅れて来た。皆を待たせた。

「遅いわよ、山辺。」

「遅いですよ」

「遅いわね、山辺。」

みんなから文句を言われている。しかし…

「ごめんw」

「まったく…、それでは、行きましょう。」

「ああ（わかった）」

私の促しで取りあえず出発した。

「やっと到着した〜」

美希が地面にぺたりと座った。

「ついたね、じゃあ、テントを設営しよう。」

「そうね、それじゃあ…支倉先輩。」

「ええ、わかったわ。」

私の合図で、桐原先輩と支倉先輩がテントを…

「えっと…水は…」

「じゃあ、俺とラバが行くよ。いいよな？」

「ああ、わかった。」

島先輩と桜庭先輩が行くことになった。

「じゃあ、私たちは何をしましょう？」

宮澄先輩が尋ねてきたので…

「じゃあ、お昼ご飯を兼ねた晩御飯を作りましょっ  
」

「そだね、そうしよう」

「わかりました、準備をしましょう」

私たちは晩御飯の準備をし始めた。

「…時間か…」

あれから少し散歩を兼ねて山を散策した。街を散歩しても仕方がないしな…。

「これといって…あまりいいものは無かったし…まっ、いつか…  
散策の結果はほぼ零に近い…それでも暇つぶしにはなったかな…

「…後5分…」

後5分後に世界はリセット…悲しいな…

「さて…祠へ向かうか…」

俺は残りの時間を使い、祠へ向かった。

「後2分ですね。」

「（そうだね、そうね、だな、ええ、ああ）」

みんながあの人…黒須先輩のラジオ放送を待っている…

今日で最後…か…

「悲しいな…」

「え？」

「ううん、何でもないよ。」

私はついくちばしってしまった。

「ほら、始まるよ。」

「（うん、ああ、ええ）」

そして…ラジオ放送が始まった。

「こちら…群青学園放送部…」

「誰か…生きている人いますか？」

「それでは、また来週……」

一週間がおわった…

## 第1部／最終話／前編（後書き）

ありがとうございました。また、感想をおまちしています（＊＾  
＾＊）  
――



第1部／最終話／後編（前書き）

取りあえず、第一部は完結です>m(\_\_\_\_\_)m<

## 第1部／最終話／後編

「こちら、群青学園放送部…」

「誰か行きている人…いますか？」

「なぐんて、今日は堅苦しい言い方を…初放送の言い方をしたんだけど…」

「それはなぜか！？つとと言うとだな…」

「実はだね…」

「これは録音したやつなんだ！！！」

「いや、まあ…だからどうしたってこともないんだけどさ…」

「まあ…いいじゃん？ちょっと試したかっただけだからさ」

「さて…みんなは、思い出を大切にしていますか？」

「俺は…久々に思い出したよ…」

「あの…大切な仲間たち…」

「大切な人…」

「今…何をしてるかな…」

「一週間…俺は…懐かしい思い出を思い出しながら…過ごしました…」

「あいつがしてくれたこと…」

「あいつが怒ったこと…」

「そして…みんなで笑いながらバカ騒ぎしたこと…」

「その何れもが大切な思い出です…」

「つと…私情でしたね」

「みなさんも、思い出は大切にしましょう」

「この先…それが…思い出で…助けられることもあります」

「忘れないで…」

「あなたには…大切な人がいる…」

「みなさんの隣には…必ず大切な人がいる…」

「どうか…忘れないで…」

「つと…そろそろ時間のようです」

「お八ガキや、感想の手紙は…」

「群青学園放送部」太一のall night world」

「にどんどんおくってくれ！」

「って、そんなものがあるかい！」

「…何を一人つつこみをしてるんだか…w」

「それでは、また来週…」

## 第1部／最終話／後編（後書き）

つまらない駄作だったと思いますが…どうか、感想をお待ちします！> m (——) m <

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6900a/>

---

CROSS†CHANNEL ~ Again to that world ~

2010年10月10日04時13分発行